

第10回 ワークショップ検討タスク議事録

1. 日時:平成26年7月14日(月)13時30分～16時10分
2. 場所:日本電気協会 4階B会議室
3. 出席者
渡邊主査(JANSI), 棟近(早稲田大学), 飯塚(東京大学), 齋藤(西日本技術開発), 島津(北海道電力), 鈴木(中部電力), 辰巳(北陸電力), 松本(MHI), 宮越(MHI),
(計9名)
代理出席者:武田(東芝, 佐藤代理), 尾本(九州電力, 重光代理), 手柴(日立GE, 三村代理), 西谷(関西電力, 森代理)
(計4名)
欠席委員:
(計0名)
事務局 :富澤, 芝(日本電気協会)
(計2名)
4. 配付資料
 - 10-1 ワークショップ検討タスク 委員名簿
 - 10-2 第9回ワークショップ検討タスク議事録(案)
 - 10-3 JEAC4111 コースIV講習会(ワークショップ)実績一覧
 - 10-4 平成25年度ワークショップアンケート結果

参考資料-1 平成25年度ワークショップ(コースIV)講習会テキスト
5. 議事
 - (1)定足数確認
全委員14名中, 代理出席者(5名)を含め13名出席であり, 議案決議の定足数(2/3以上=10名以上)を満たしている事を確認した。
なお, 錦野委員(日立GE)については, 検討会の普及・促進チームリーダーを辰巳委員に交代に伴い, 名簿から削除することとなった。
また, 事務局より新委員候補については, 次回開催の分科会で承認され委員となる旨補足説明した。
 - (2)前回議事録の確認
渡邊主査より前回議事録(案)について, 概略説明がなされ, 正式議事録とした。
 - (3)平成25年度ワークショップ(コースIV)講習会時の議事録について
委員より, 平成25年度ワークショップ(コースIV)講習会時の議事録配布の要望があり, 別途配布することとした。
 - (4)JEAC4111コースIV講習会(ワークショップ)実績について
渡邊主査の議事進行により, 資料10-3に基づき, これまでのワークショップ(コースIV講習会)の開催実績と平成25年度のワークショップ(コースIV講習会)の開催内容について説明が行われた。
 - (5)平成25年度のワークショップ(コースIV講習会)のアンケート結果について
委員より, 資料10-4に基づき, 平成25年度のワークショップ(コースIV講習会)のアンケート結果及び過去からの変遷について説明があった。
 - (6)今年度のワークショップの開催内容について
渡邊主査の議事進行により, 平成26年度のワークショップ(コースIV講習会)の計画について説明があった。
 - 1)日時, 会場は, 12月12日(金)10～17時, 日本電気協会会議室(A～Dを予約済)で開催することとする。
 - 2)今年度は100名規模を見込んだ講習会で計画する。

3)前日の夕方に主要な委員に来てもらって会場レイアウト等を確認する。

(7)今年度のワークショップ(コースIV講習会)のテーマについて

渡邊主査の議事進行により、今年度のワークショップにおけるテーマについて、各委員から現状の問題点、課題等について意見が述べられた。

これらの意見等を踏まえ、今年度のワークショップ(コースIV講習会)のテーマの絞り込みが行われ、テーマ候補として以下が挙げられ、各テーマの担当が決められた。

なお、講習会内容等の詰めについては、リハーサルまでの間メールベースで詰めて行くこととする。

1)テーマについて(各講演の順序は①②③④の順序とする)

①品質保証の部分最適化(総括/10年の反省)→宮越委員

②米国の取組み→渡邊主査

③安全文化(吉田教授/楠神副所長)

※吉田教授/楠神副所長の講演時間は1時間として、吉田教授には、安全文化とリーダーシップの講演内容をお願いすることとする

④異業種(JR東/JR西)

2)講演者への事前の相談について

①吉田教授/楠神副所長には、委員(主査を含む3名)が事前に伺い説明し、早めにアポどりする。

②吉田教授には次回分科会開催よりも前に事前相談する

③吉田教授にはリハーサルにもお越し頂く事とする。

(8)今年度のワークショップ(コースIV講習会)のリハーサル期日等について

1)平成26年11月10日(月) 13:00～日本電気協会会議室(C, D会議室)で行う

2)別途、事務局よりリハーサル開催案内を送付する。

以上

今年度のワークショップにおけるテーマについて、各委員から現状の問題点、課題等

- 1) 規制要求の中に4111-2009が取り込まれて、細かい対応が必要になった。
 - 2) 米国における品質保証活動の紹介と4111-2013との関係、特に9章(安全文化とリーダーシップ)について先生方の受け止め方などを聞きたい。
 - 3) メーカーとして、機器単体でのリスクマネジメントについてどう考えるかというところを、聞きたいと思う人間が多いと思う。また、安全文化として何をすべきかというところが課題と思っている。
 - 4) QMSに安全文化醸成活動をどういうふうに取り込んで作り上げていこうとしているか。独立アセスメントをどういう風にやろうとしているか、そのあたりの進行状況を説明してもらえると良いと思う。
 - 5) 安全文化醸成活動という点で、事業者からメーカー(供給者)に要求していることについて、各々の対応状況を説明してもらえると良いと思う。
 - 6) 自分自身の問題意識として、これまでやってきたワークショップを俯瞰すると、今何が課題かという点、部分的に最適化を図ってきているような気がする。夫々の段階で、規制側との対応でQMSが導入され、ある時から安全文化が入ってきているが、インテグレーションの機能が弱いと思う。部分最適化をしてきているが、安全文化とQMSがあたかも別々のシステムで回っているように見える。また、どうすれば良いかというQMSの相対化を利用できる立場が必要であり、それを可能とするのが安全文化(リーダーシップを含む)だと思う。安全文化としての表れのQMSであるから、安全文化(リーダーシップを含む)を見ていけばインテグレーションされていることが分かると思う。従って、吉田先生に加わって頂くことで、この点は充実化できると思う。また、福島事故以降、リスクマネジメントと関係するが、リスクだけが残って不測の事態のマネジメントが必要であり、不測の事態のマネジメントに対応するにはレジリエンスが出てくると思う。おそらく他産業の方の話で、JR東日本の研修で行っている事故発生時の対応という点からレジリエンスについて話ができると思われる。
 - 7) 安全文化については自主的に向上させていこうと取り組んでいるが、我々の中でも効果の確認をアンケート等で実施しているが、アンケート結果からどのように寄与しているかという点が計り知れないところがある。また、他の産業も踏まえて取り組んでいきたいと考えている。米国とかのやり方を取り入れているがやり難さもある。本日の議題にも挙がっているが、米国とは文化の違いなどもあり、米国の場合は人材育成とか力量管理がしっかりしている点があり、その中で取り組む安全文化は、日本の場合は性善説に基づいた人材育成を行っているところがあり、日本とは考え方が違うと考えている。
- リスクマネジメントについては(サプライヤーとしての考え)製品提案、供給するうえで、リスクの共有を事業者としながら取り組むが、共通の方法があれば良いと考えている。リスクに対しての共有をどのように表に出していくかが課題ではないかと考えている。
- 8) 資料10-3に記載の今までの講習会を実施してきて、福島事故を考えると、今までやってきて品質保証に携わる者として、何を反省すべき事項どこで防護性が弱かったとか総括すべきであると考えている。部分最適化の話があったが、1つ1つは必要であるが、これまでの講習会がどのように寄与したかという点から、あまり寄与していなかったのではないかと感じる。福島の事故は安全文化、リスクマネジメント、財務のリスクマネジメント等の話が出てくるが、安全文化等はQMSの中に入り込んでいるが、福島事故を止めることができるかというところではないと思う。これらの点も含め総括することが必要であると思う。
 - 9) 安全文化のPDCAを回すために、評価をして質の向上を図るために、外部アセスメントとかアンケートを実施したり、不適合管理などを実施しているが、それ以外に他にないのか広く専門家の意見、他社の実施状況調査をしたりしているが、国内外、海外の事例等について大きな目で見ることが大事ではないかと。このような観点から改めて学習しておきたいと思う。
 - 10) 安全文化の醸成について、具体的にどうしたら良いか悩ましいところがあり、全てのレベルを上げるにはどうしたら良いか、また、どういう評価し次に繋げていけば良いかを考えていきたい。
 - 11) 委員として、確かに福島事故の1つとして海外に学ぶという観点から、JANSIでも海外の事例を学ぶこととしており、米国で電力間の相互監査をしているので見てくることにしている。品質保証という観点で相互監査をしていることを説明するが、反応が鈍い。
- 日本では電気協会がワークショップを開催しているが、米国ではQA関係の人が集まってオーバーサイトカンファレンスを3日間開催する中で、プログラムを作成し大勢の人(NRCも入って)が相互発表などを行いオープンにディスカッション、情報交換している。
- 先月末にJANSIの人が行ってきたが、活発な活動をしているとの報告であった。
- 日本でも同様に実施するには情報不足で、実際に自分の目で確かめたいと思っているが、海外の情報については未だに弱い実態があると感じている。

- 規制との関係も日米の違いがあるのではと思う。米国等の状況をもっと把握した上で反映していきたいと思う。
- 12) 委員より部分最適化という発言があったが、福島事故規制対応を受けて10年が経過し総括をする必要があると感じている。
- 13) 安全な社会を作るという点で、規制が謙虚に勉強する必要があるのではないかと思う。私たちがこういう生業をしている上で大事なことは、説明責任ということである。説明責任という概念自体もきちんと理解しておいてほしいし、概念自体を説明していかないといけない。謙虚に説明責任を果たすということを考えたい。いろいろ努力しているが、事業者は事業者としての価値基準で対応しているが、事業者の立場で(規制を入れないうで)規制の意義を考える必要がある。規制側とは関係なく事業者として現代社会に対して意義を考える必要がある。福島事故の時に大臣の顧問会議の時に2つ言った。1点は原子力に対するリスク論を根本から考え直す必要がある。もう一つは技術についてであるが、結局日本全体として技術が足らなかったのではないかということ。原子力の安全に対して誰の考えに従えば良いのかということに関して明確でないことである。これを何とかしないといけないと思う。技術のことについては話が大きすぎるが、改めて考える必要がある。また、本日のリスクの話が出たが、リスク論の話をしてもいいのではないかと思う。
- 14) 他業種でやっていることを説明して頂く機会を設けて皆で考えて頂きたいということが1点と、最近防災、安全の社会を作るという研究テーマがいろんな分野で多いが、そこにはレジリエンスということが関連するが、レジリエンスを測れないからPDCAが回らない。従って、レジリエンスをどうやって測るかが重要だと感じている。
- 15) 昨年6月のIAEA会合の緊急時対応マネジメントでレジリエンスの話が出されたとのこと。TMIはマンマシンインターフェイス、チェルノブイリは安全文化である。今回の福島事故は何だったのかというレジリエンスではなかったかということが主流になりつつあるようにNRCの議事録から読んだということ原子力規制委員会委員(元東電社員)のレポートにあった。
- 16) 今回のIAEA DS456のステップ10でも新たな要求事項でもレジリエンス組織を構築するということが記載されている。レジリエンスについてはどう育成しどう測るかということが明確ではなく、独り歩きしている。
- 17) どういうスコープで言っているかによって全然違う。原子力の狭い範囲のことを言っている。不足の事態の対応マネジメントということなら良いが、いろんな意見が出てきて、定義することが大事である。
- 18) HFの世界は、100人が違うことを言い始める。そこに陥らないよう我々自身が勉強しておく必要がある。
- 19) 想定外を想定できない。想定外のことが起きた時にどうするかを予め考えておく必要がある。